

# 佐伯文談

第一〇二号

「郷土文研究」誌  
通算第一二四号昭和五十年九月廿三日発行  
佐伯文談会

事務所 佐伯市大字稻垣字龍藏寺羽柴方

隨想

## 京都遊記

佐伯文談会

会長 高木嘉吉

私は、去る七月の七、八、九の三日間、京都を訪れた。大本山妙心寺で、五月一日に死亡した家の供養が行なわれるので、それに参列するため上京したのであるが、ついでに京都市内を若干探訪する機会を得たので、印象に残ったことを記して参考に供したい。

それから斎座(ときざ)がもたれて、辯寺得意の山菜料理を駆走(され)た。かくて妙心寺に別れを告げたが、連錦(れんきん)たる法統と、肅然たる宗風は、参詣する檀徒の心を淨化するであらう。

午後のひととき、私たちばうち連れで祇園を散策し、お茶漬専門店「民芸」で食事をし、一日を終

### 本文の内容

腹恩 京都遊記(高木嘉吉)――  
研究 海部と總門と佐伯(安賀貢)――  
講義 幕政時代の農民(羽柴弘)――  
著書 滋賀州佐伯村志原元青(矢野謙吾)――  
研究 第二次昌潤佐伯開拓團(小史)――  
講義 木水部落教育林(山田裕之)――  
著書 佐伯風土記(山田武雄)――  
―― 赤とんぼ、カギリおけ――

資料 宮内省大納言清廉美(用柴)  
著者 清太・児玉家文書――  
研究 横川先生と佐伯山(山本景)――  
研究 明石秋室の愛読書(羽柴弘)――  
著者 上喜良富良神社の秋祭――

七日十五時三十七分京都駿着、先着の海福寺田中禅鑑和尚に迎えられて、一先ず花園会館に落ちつく。花園会館及花園会の営業であるが、近代的で大きな施設である。八日、いよいよ妙心寺に詣でる。南門をくぐると左手

あらずすんだことほ幸いであつた。

つた。

九日は夕方、新大仏から「彗星」に乗って帰ることにして切符の手配をすませ、ゆっくり京都のあちこちを探訪することにした。タクシーを借り切って、午前八時から午後四時まで乗りまわした。

先ず嵐山へ。曾遊の地であるが、道路の整備などが進んで、いささか俗化した感がある。しかし桂川の清流と、

全山の翠綠は、京都西郊の名所たるに恥じない。

答寺 本当の名は洪隱山西芳寺である。庭中一面百二十  
八余種の苔におおわれて、見事である。

天龍寺 後醍醐天皇・足利尊氏・夢想國師と、遠く南北朝の昔のしきばれる寺である。曹源池は、名園なるかなど感嘆をえくした。

以上は京都の西郊であるが、一転して東山に車を走らせる。

銀閣寺 平安神宮・智恩院・円山公園・八坂神社・清水寺・三十三間堂、みな曾遊の地であるが、何處訪れてもよい。それぞれに独自の風格があり、数百年の歳月を経た風致がある。

等持院 足利十五代、二百三十年の歴史を語る、足利將軍家の菩提寺である。靈光殿には歴代將軍の木像が納められている。夢窓国師作の芙蓉池の庭は、幽すいで趣きが深い。

泉涌寺 京都駅の南東、東山の麓にある。皇室の菩提所として、靈明殿には歴代の天皇・皇后・皇族の、尊牌が奉安されている。ここでとくに紹介したのは、楊貴妃觀音である。これは唐の玄宗が、安禄山のために殺された楊貴妃を慕い、その冥福を祈つて、その等身坐像にあたどつて、聖觀世音菩薩像を、香木で造頭せしものである。その後五百余年を経た建長七年(一二五五)、度宗

僧湛海によつて我が國に將來され、泉涌寺の楊貴妃觀音堂に安置されて今日に至つてゐる。美しい、實にすばらしい。西郊広隆寺の弥勒菩薩に相対する、洛東の美風うの仏像として、贊嘆されるゆえんである。

筆林院と泉涌寺は、訪れた人が少ないので、と思つて、やや詳しく紹介した。上洛の節は探訪されるようお勧めする。

右の様に沢山の寺を回つて、故人の冥福を祈り、他面遊心と詩情を満たしたが、とくに感じたことはその庭園である。

「はず」礼も名園で、絵はがきや写真で見直しても、あれこれ重なり合つて、ほつきりしない頗りなさであるが、一心に見入つて我を忘れさせいである。

ここで今一つ、禪文化と作庭について一考したい。巍然たる堂塔伽藍も、清楚な茶室も、巡るすに山水の美をもつてせねば、無味乾燥で物にならない。

禪寺の庭園は、禪脩の懇いの場であり、悟りの場であつたのだろう。凡愚の私でも名園にたたずむと、その靈気によだれ、何か止揚され大感じがする。機を得て、一日なり半日なりかけて、一つの名園をゆっくり鑑賞したいと思つてゐる。

（へおわり）

### 故長門葉先生の歌 二首

この國の南のはてと波当津浦を恋ひ恋ひて二人  
山を越えにき

西風の荒るれば濁る石間浦をかすめとれ秋冬に  
入りたり